日本音楽学会　2025年3月16日発行

電子版

西日本支部通信　第26号（通巻126号）

Nishi-Nihon Branch Newsletter No. 26
The Musicological Society of Japan

発行：日本音楽学会西日本支部
〒870-1192 大分県大分市大字旦野原700番地
大分大学教育学部 松田聡研究室
E-Mail: msjwestatoita@gmail.com
TEL：097-554-7616

巻頭言

支部長　松田　聡

私が西日本支部長として、この「巻頭言」を執筆するのは、今回が最後のこととなります。西日本支部会員の皆さまには任期中、大変にお世話になりました。篤くお礼を申し上げます。

この「支部通信」でお伝えしてきましたように、定例研究会は 2 年間で 7 回、開催することができました。とりわけ今年度は、4 月に発表募集を行ったところ、応募者が多かったため、急遽、8 月にも追加で開催することとなりました。皆さまの積極的なご参加を心より嬉しく思っています。残念ながら、私がそのすべてに出席することはできませんでしたが、直接に接した発表はもちろん、「支部通信」を通じて概要を知ることができた発表からも、常に大きな刺激を受けてきました。そのことを振り返りつつ、研究発表の場があること、さらには、そもそも学会という組織があることの意味合いを、あらためて実感しています。

ところで、日本音楽学会の来期の会長・委員選挙の開票結果は、学会 Web の「会員専用ページ」に掲載されていますが、ご覧になった方は、新たな西日本支部委員の人数が、今期より 1 人減って 9 人になったことに気が付かれましたでしょうか。これは、選挙権のある西日本支部の正会員の人数の減少によるものです。具体的には 293 名から 273 名へと、約 7%の減少となりますので、日本の人口が減ったせいにするわけにもいきません。その点は支部長として力及ばず、申し訳なく思っています。

他の支部も、本支部ほどではないにせよ、会員は減少していますので、これは学会全体の問題でもあります。それに対しての努力もなされており、昨年 11 月に開かれた総会では、継続審議となりましたが、高校生も学生会員として認めたり、一般の方の会員の要件にあった「相当の経歴のある」という文言を外したりするなど、「門戸を広げる」方向での会則改訂が提案されています。また、そのうちに発行される予定の Web 雑誌『MSJ+』も、本学会について多くの人々に関心を持っていただく有効な手立てとなるはずです。

ただ、何より大切なのは、活発な学会活動を継続することでしょう。来季の新体制の下でも、会員の皆さまの引き続きのご協力を、ぜひお願いいたします。

2025 年 3 月 10 日

□　目　次　□

支部長　巻頭言　・・・・1

定例研究報告　西日本支部第 61 回（通算 412 回）定例研究会　・・・・2
＜研究発表＞
1. 青嶋絢（大阪大学）
音列、シリンガーから図形楽譜へ――アール・ブラウン初期作品の分析と考察
要旨：青嶋絢　報告：清水慶彦

定例研究報告　西日本支部第 62 回（通算 413 回）定例研究会　・・・・4
＜研究発表＞
1. 石戸信也（日本絵葉書会、兵庫県立尼崎高等学校）
近代日本の音楽堂（奏楽堂）――絵葉書に見る演奏空間の展開――
要旨：石戸信也　報告：筒井はる香
＜講演＞
1. Ruth Smith（英国ヘンデル協会 The Handel Institute）
The significance of the Temple in Handel's oratorio *Solomon*
報告：松井典子

編集後記　・・・・6

□定例研究会報告□

■西日本支部 第 61 回（通算 412 回）定例研究会
日　　時　：　2024 年 8 月 3 日（土）14:00-17:00
会　　場　：　Zoom によるオンライン開催
例会担当　：　松田聡（大分大学）
司　　会　：　松田聡（大分大学）
内　　容　：　卒業論文発表・博士論文発表・研究発表
※卒業論文発表と博士論文発表については第 25 号をご参照ください。

博士論文発表

音列、シリンガーから図形楽譜へ
――アール・ブラウン初期作品の分析と考察――

青嶋絢

<u>発表者による要旨</u>

青嶋絢

アール・ブラウン(1926～2002)は、音楽における不確定性、記譜法の革新を独自に追求したアメリカ実験音楽グループの一員として知られる。ブラウン作品の中で最もよく知られる《ディセンバー1952》December 1952 (1952)は、図形楽譜の視覚的目新しさからそのコンセプトについて論じられることが多く、先行研究のほとんどがこの作品に集中する。一方で、図形楽譜(1952 年)以前の作品を取り上げた研究はほとんど見られないという偏りが生じている。本発表では、図形楽譜以前のブラウン初期作品の音響分析を中心に、十二音技法、シリンガーシステム等の理論の影響を検討し、図形楽譜へと展開する過程を明らかにすることを目的とした。

まず、代表作とされてきた図形楽譜と初期作品の違いについて、初期の３作品が１２音列を用い、伝統的な記譜法で作曲されたことを説明し、ブラウン作品全体における初期３作品の位置付けを確認した。次に最初期の作品 Three Pieces for Piano (1951)を取り上げ音列分析の結果を示した。

音列分析から、曲全体の構造と音列の配置を確認して、次のようなことがわかってきた。第一楽章は基本の四音列の入れ替え構造から始まり、第二、第三楽章へ進むに連れて、移高した音列を用いた複雑な構造になる。その中でも、「音列の途中から始める、音を一部省略、音列の順番に従わない、音列と関係のない音が挿入されている」など音列の規則性を逸脱している箇所が多数認められることを示した。

続いて、「音列の規則性を逸脱した点」に着目し、その理由について検討し、音の省略や音列順に従わない箇所については、和音と関係がある可能性を指摘し、和音の分析を行なった。例えば、基本音列の音程関係をみていくと、コードに対して 7th, 9th 11,th 13th といったテンションノートを分散させていることが示される、これはシリンガーシステムの影響が示唆されることをシリンガーの教本を示して説明した。

最後に、音響の分析に加え、ブラウンによる論考、当時の音楽仲間との書簡などから言説を拾い上げ、作曲に対する思考と併せて考察を行った。ブラウンの初期作品は、音列を用いてはいるが、シェーンベルクの音列技法とは厳密には言い難く、シリンガーシステムの応用として音列技法を用いていることを検討する必要があることを指摘。後の図形楽譜を含む作品の分析おいても、今回の得られた視点や分析方法がブラウン独自の音響設計を理解する助けとなるのではないかと結論づけた。

<u>レポーターによる報告</u>

清水慶彦

本発表は，アール・ブラウンのピアノ作品《Three Pieces for Piano》（1951 年）を十二音技法の観点から分析・考察するものである。発表者はブラウン作品の研究について，図形楽譜による《December 52》（1952 年）が注目されがちで，コンセプト等についての研究はなされているものの音響の面からの議論が不足しているとし，その点を回収すべく，《December 52》以前の初期作品であり，作曲者が十二音技法の使用を明言している本作の分析に取り組んだとする。

一般論として，いわゆる十二音技法による作品では（シェーンベルクの作品も含めて）音高が楽曲全体にわたって徹頭徹尾音列順に現れるわけではなく，何らかの操作なり逸脱なりが含まれることが少なくない。本発表も，そのような十二音技法の実践における音列の操作や逸脱に着目したものといえる。

発表者は，作中に音列構成音の省略や音列順に沿わない音高の使用，音列の和声的用法などがみられることを指摘し，ブラウンが学んだ音楽理論であるシリンガーシステムの影響について言及したうえで，本作においてブラウンは，シェーンベルクの音列技法とは異なる，シリンガーの発想で考える音列技法を採用していると述べる。なかでも，一部に音列にもとづきつつジャズ風のテンションコードとして響く個所がみられることから，本作での音列が，コードを先に設定したうえで，それをもとに構成された可能性があると指摘された点は興味深かった。

一方で，分析の精度についてはさらなる向上を期待したい部分もみられた。提示された楽譜を見る限り，発表者が音列構成音の省略とする音高が，続く音列の開始音として共有的に使用されるケース（ウェーベルンが用いた手法でもある）や，省略音が他の音列の構成音（と発表者が解するもの）として近接して鳴るケースなどが散見された。あくまで提示資料を瞥見したにすぎず筆者の誤認もあろうが，何をもって音列構成音の省略とするのかや，省略の解釈等についてはさらに精査されてよいだろう。

また，シェーンベルクの音列技法とは異なるという発表者の主張については，本発表ではあまり具体的に明示されていないようにも感じられた。程度の差はあれ，音列構成音の省略や順序変更，音列の和声的用法などはシェーンベルクの作品にもみられるものであり，あるいは曲中の音列配置の手法にはウェーベルンのそれとの類似を思わせる部分も含まれた。これらもふまえ，ブラウンの音列手法の独自性やシリンガーシステムとの関連について，より具体的に考察されればさらに意義深い研究になるものと期待される。

■西日本支部 第 62 回（通算 413 回）定例研究会
日　　時　：　2024 年 11 月 30 日（土）14:00-17:00
会　　場　：　同志社女子大学今出川キャンパス 純正館 S401
例会担当　：　大田美佐子（神戸大学）
司　　会　：　大田美佐子（神戸大学）
内　　容　：　研究発表・講演

研究発表

近代日本の音楽堂（奏楽堂）
――絵葉書に見る演奏空間の展開――

石戸信也

発表者による要旨

石戸信也

手のひらの中の「情報の宝庫」すなわち「掌中のメディア」とも言われる絵葉書について、近年、内外でその評価が高まり、発表者も寄稿している日本絵葉書会の結成など活発な活動が展開されている。音楽史とこの絵葉書というメディアの交錯から、近代日本の音楽堂（奏楽堂）の展開を追跡しようと試みた。郵便史では明治 33 年（1900）10 月に私製絵葉書が解禁され、単に神社仏閣・温泉・名所など観光土産にとどまらず、広告・記念品・報道・プロパガンダに至るまで絵葉書は多様な目的で発行された。写真利用と安価で量産され郵便制度や鉄道（旅行）普及を背景とした、まさに近代の象徴である。音楽絵葉書のジャンルとしては、特に洋楽受容と密接に関係し、風琴・洋琴・提琴・手風琴などの演奏シーンや、内外の音楽家や来日した音楽家、楽器店の販売広告、さらに蓄音機やレコードの宣伝など多彩である。軍楽隊（吹奏楽）が 19 世紀のイギリスのヴィクトリア朝文化の招来とともに広まり、絵葉書では横浜山手公園を嚆矢とする音楽堂（奏楽堂）を写したものが量産された。日比谷など洋式公園や遊園地、各種の博覧会・共進会、さらには東アジアの各地で音楽堂は造られ絵葉書となる。まさに視覚化された洋楽受容である。建築史で見れば当初は正八角形など周縁から鑑賞できる言わば円型の音楽堂絵葉書が多く、やがて対面型の野外ステージの音楽堂絵葉書に変化する。この移行を約 80 例の時系列化で、大正 12 年（1923）の関東大震災を分岐点とすることを浮かび上がらせた。日比谷野外音楽堂の全壊を写した絵葉書は全国の音楽堂建築に衝撃を与えたに違いない。そして演奏曲目の多様化と高度化、洋楽普及による観客増加、音響効果も求められ、円型の音楽堂は姿を消していき、あるいは公園の休憩所（ガゼボ）化する。さらには公会堂や専用の音楽ホール、1000 人以上収容の大劇場などが各地に生まれ、演奏・鑑賞は天候の不安の無い空間に発展した。また一方で、ラジオ放送や蓄音機レコード普及が私的な演奏観賞空間を広げることも各時代の絵葉書から追跡した。そして昭和 5 年（1930）の帝都復興記念式典の君が代やジャズを鳴らす音楽堂花電車や音楽自動車絵葉書からは、もはや音楽はプロパガンダのために音楽堂を飛び出して政治利用されていく様子さえ伝えられているのである。

レポーターによる報告

筒井はる香

本発表は、絵葉書をツールとして近代日本の音楽堂の建築様式の変化を考察したものであった。明治 33 年に私製絵葉書が解禁されて以降、絵葉書は、郵便制度に基づいた量産できる廉価な商品、観光と結びつき各地の名所をセットにしたお土産として明治期以降に広まった。そのコンパクトなサイズから「掌中のメディア」とも称され、当時の建築や文化を映し出す貴重な一次資料として注目を集めている。

発表者は、はじめに近代日本における洋楽の導入を表す西洋楽器の演奏シーンや、来日した著名な演奏家、輸入楽器店やホール等の絵葉書を示した。次に、日本の音楽堂の始まりについてヴィクトリア朝文化からの影響が指摘された。産業革命時に労働者の気分転換の場として作られた公園に円型の東屋が建てられ、休憩所兼野外音楽堂として機能していた。同様の東屋は明治 3 年、横浜山手公園に設けられ、そこで軍楽隊の演奏が行われていた。発表者は、音楽堂が映し出された 80 点余りの絵葉書を分析し、明治期から大正期にかけて全国各地に円型の音楽堂が普及したこと、大正 12 年の関東大震災を境にして音楽堂の様式が円型から対面型に移行したことを明らかにした。関東大震災後の新しい耐震制度の導入が建築様式に影響を与えたことが示唆されたが、この変化は、様式の変遷にとどまらず、当時の社会状況や音楽文化の変化を反映している点が注目される。発表ではその他、移動しながら演奏する「音楽堂バス」や小さなレコードが収められた「レコード絵葉書」など興味深い例も豊富に示された。

質疑応答では「収集方法」「絵葉書として発信しようとした理由」「奏楽堂に演奏者が描かれていない理由」など多岐にわたる質問が出された。収集方法は古本屋の他、絵葉書収集家や美術家による交換会だそうだ。「円型から対面型への変化の背景」についての議論も行われた。発表者によると、その背景には天候の変化の有無や聴衆の増加、演奏レベルの向上も考えられるとの見解が示された。フロアからは音響の問題についても指摘があった。今後、これらを裏付ける研究が待たれるところである。

石戸氏の発表は、絵葉書という身近な資料を通じて、歴史研究の新たな可能性を示唆する刺激的なものであった。発表者が強調した「点描画のように小さな点がたくさん集まれば一つの面になる」という言葉は、まさに本研究の意義を的確に表していると言える。本研究は、絵葉書という視点から日本の近代史における音楽堂の変遷を明らかにし、今後の音楽史研究に新たな知見を提供するものである。

講演

The significance of the Temple in Handel's oratorio *Solomon*

Ruth Smith

レポーターによる報告

松井典子

11 月 30 日、同志社女子大学今出川キャンパス純正館において、英国ヘンデル協会評議員で、特にヘンデルのオラトリオ及びオペラ研究で著名なルース・スミス氏を迎え講演会が開催された。同氏は大著『ヘンデルのオラトリオと 18 世紀思想』で広く知られている。

講演題目は、「ヘンデルのオラトリオ《ソロモン》における神殿の意味」で、質疑応答も含め約 1 時間半にわたる内容。講演では、作品に登場する神殿に焦点を当て、ヘンデル自身や当時の聴衆にどのような意味をもちえたのかが議論された。冒頭の神殿奉献の音楽に象徴されるように、なぜ「神殿」に重点が置かれているのかを解明するため、リブレット作者、時代背景、政治、宗教、当時の英国の人々の思想など、多様な視点から多角的に考察した。

神殿の創建は、ユダヤ教キリスト教の双方で重要だが、ソロモン神殿は架空の神殿である。しかし、旧約聖書の「列王記」や「歴代誌」には神殿の建設、寸法、調度品、装飾について詳細に記されており、ヘンデルの時代にはこれが実際の歴史記録として受け入れられていた。また、1717 年にはヘンデルの故郷ハレに、1723 年にはヘイマーケットにソロモン神殿の復元模型が設置され、ヘンデルが模型を通じて神殿のイメージを知り得たことが考えられる。オラトリオには舞台演出や衣装、背景がないにもかかわらず、ヘンデルの音楽とリブレットは、どのような絵画や模型にも勝る壮麗な神殿を聴衆の想像力によって描き出したことが指摘された。スミス博士は、ヘンデルの聴衆にとって、神殿の象徴的価値が音楽にも及んでいた点を、これまでの研究者の見解に基づき説明した。

ヘンデルが英国にいた時代、キリスト教が国教として国家と深く結び付き、人々の生活の中心的な役割を果たしていた。また、近世ヨーロッパでは、旧約聖書に記された出来事を、当時の歴史的背景や行動の象徴として解釈するのが一般的であり、ヘンデルのオラトリオにもその影響が見られる。特に合唱が重要な要素となっており、リブレット作者は聴衆に感動を与える目的で、3 つの神殿合唱の場面を設定した。ヘンデルは、神の力に対する畏敬の念を表現するため、前世期の聖楽に特徴的な半音階的なゆったりとしたコラールのテクスチュアを用い、深い感銘を与える音楽を創り上げている。

《ソロモン》のリブレット作者に関しても、250 年以上匿名とされていたが、近年、ロンドンの文学界や演劇界で活躍し、フリーメーソンでもあったモーゼス・メンデスによるものとする説が有力視されている。フロアからは、《ソロモン》と現代の反ユダヤ主義的思想との関連、ジャコバイト反乱（1746 年～1747 年）とオラトリオ《ソロモン》初演（1749 年）との関連性、そしてヘンデルが《ソロモン》をオペラではなく、オラトリオとして作曲した理由について質問が寄せられた。これに対し、オペラは英語で上演されなかったこととオラトリオが合唱を取り入れる形式であったことが理由の一つとして挙げられた。

ヘンデルのオラトリオ《ソロモン》は、平和と公正を讃える普遍的なメッセージを持ちながら、18 世紀の英国の政治的・宗教的な文脈の中で聴衆と深く結びつた作品である。その象徴性や音楽的形式は、現代においても新たな解釈の可能性を提示している。本講演は、18 世紀の思想や宗教、文化的背景、政治との関連を紐解き、聴衆に新たな視点を提供した。時空を超え、当時の民衆が思い描いた「神殿」の姿に想いを馳せる貴重なひとときとなり、博士の緻密な研究の深みと広がりを垣間見る、非常に刺激的で意義深い時間となった。

□　編集後記　□

『西日本支部通信』第 26 号（電子版）をお届けいたします。今号には二回分（第 61 回の追加掲載分、第 62 回）の定例研究会報告が収録されています。要旨や報告をお寄せいただいた発表者とレポーターの皆様に厚くお礼申し上げます。

私の西日本支部委員の任期は、この三月をもって終了しますので、私が編集を担当する『西日本支部通信』も今号が最後となります。四年間の任期中、編集幹事としてご尽力いただいた立命館大学大学院の奥坊由起子さん（第 20 号から第 22 号まで）と西澤忠志さん（第 23 号から第 26 号まで）には、最後にあらためて感謝を申し上げます。本当にありがとうございました。

今後とも西日本支部の活動にご協力いただけましたら幸いです。最後に、各種学会関連情報のアクセス方法についてお知らせします。（Y）

FILE　西日本支部通信

年に 2 回、PDF で発行され、西日本支部のホームページより随時閲覧可能です。個々のご事情で、紙面版の送付をご希望の会員は支部事務局にご相談ください。

MAIL　日本音楽学会Information Mail

学会本部より毎月 1 回、各支部の例会、支部横断企画、研究発表奨励金など、多様な情報が送信されています。登録ご希望の方は、日本音楽学会本部事務局 office (at) musicology-japan.org 宛に、件名を「インフォメーションメール登録希望」としたメールを送って下さい。

日本音楽学会西日本支部メーリングリスト（msj-k）

支部会員のコミュニケーションを促進し、音楽（学）や学会活動などについて議論や情報の交換をおこなうことを目的としたメーリングリストです。登録ご希望の方は、担当の池上健一郎委員 ikegami-k@kcua.ac.jp までご連絡ください。

WEBSITE　日本音楽学会　http://www.musicology-japan.org/

日本音楽学会西日本支部　https://msj-west.com/

当通信へのご意見・ご質問、ならびに原稿掲載のご希望がございましたら、編集担当委員までご連絡（連絡先は末尾に記載）ください。あわせて、本部・支部の事務局等に宛てて原稿をたまわる折、PC の記号の用い方について、以下ご参考くださいますと幸いです。

- 以下の記号は、ウェブサイト上で適切に表示されない場合があります。
  文字内の補助記号（ウムラウトやアクサンなど）　/　半角カタカナ
  文字装飾（丸付き文字や全角データとしてのローマ数字）
- 文中に傍点や書式設定（ゴシック・イタリックなど）の設定をなさりたい場合は、メール本文でなく、Microsoft Wordのファイルに記入して、メールに添付してください。

日本音楽学会『西日本支部通信』第26号
発行者：日本音楽学会西日本支部
事務局：西日本支部長　松田聡
〒870-1192　大分県大分市大字旦野原700番地　大分大学教育学部 松田聡研究室
E-Mail: msjwestatoita@gmail.com　TEL：097-554-7616
編集者：吉田寛（2024年度編集委員）
〒113-0033　東京都文京区本郷7-3-1　東京大学文学部美学芸術学研究室
E-Mail: hyoshida@l.u-tokyo.ac.jp